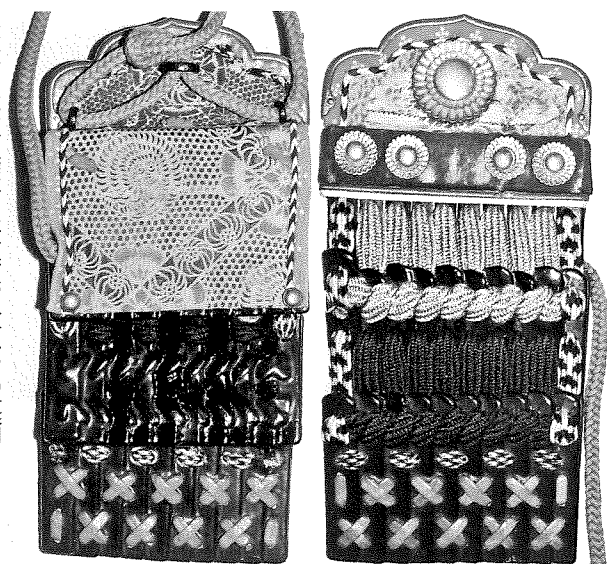


〔連載〕 武蔵御嶽神社宝物シリーズ22
国指定 重要文化財 紫裾濃鎧の梅檀板

日本風俗史学会会員 齋藤慎一
前青梅市文化財保護審議会会長

中世の大鎧は、胴の前立挙、胸板の幅を狭く、胸の高紐の左右に隙間のできる構造にして、馬上での弓射や太刀打ちの運動をしやすくしています。例えば平安末期の御嶽の赤

糸威鎧の胸板（前立挙の上部の鉄板）幅は18cmしかありません。年代下降と共に幅は広くなる傾向ですが、紫裾濃鎧でも23cmという狭さなのです。そこで、隙間防禦のために



写真右は紫裾濃鎧の梅檀板。左はその裏面

左の高紐に鳩尾板という細長い鉄板を、右の高紐には、鉄板の冠板に小札板三段をつけた梅檀板を結びつけて防禦としました。

共に長さ30cmにも満たない細幅の防具です。

一枚の鉄板である鳩尾板より屈伸性のある小札板を主とした梅檀板が右側につくのは、

右手の運動量を考慮したからです。

梅檀板は、鍍銀の覆輪をかけ、絵草を貼った三山形の幅11.7cmの冠板に小札板三枚が付き、全高24cm。冠板は中心の高さ約6.4cmの辺で内側へ折って幅0.9cmの棚造とします。この棚の足の幅2.0cmの下辺は、古くは唐沢山の焼け金具の梅檀板のように切欠式、御嶽の赤糸のように切透（窓を切る）式もありましたが紫裾濃のそれは「集古十種」で描くごとく一文字式と称する加工のない足です。

冠板上縁の三山形の輪郭の中央は、八稜鏡（ヤタノ鏡）の一稜の花尖型に似たなだらかにとがる火頭型で、仏具の磬の上縁の優雅な輪郭を連想させます。その左右のあさい谷につづく山は、低く丸味を帯び、赤糸威の梅檀板の三山の古雅なならかさと同通します。この三山形の輪郭はこれ以後は、肩が張って谷深く、

左右の山も誇張されて全体がいかつく、優雅さを失って、強さが先行した三山に変わってゆきます。紫裾濃の梅檀板の三山形は平安時代の優美と鎌倉時代の緊張の境目に位置して、王朝の配色である裾濃とも調和した優雅を、なお残しています。

中心の山が尖る古い三山型の輪郭は平安後期の赤木家の赤糸威鎧（兜欠）、鎌倉初期の大三島の紫綾裾鎧（兜欠）の梅檀・鳩尾板の三山型に共通します。しかし紫裾濃の方は、尖り方が、ややひきしまって、鎌倉中・後期の武家主体の時代への志向を印象させます。

紫裾濃の梅檀の全高は約24cm。幅は上部11.7cm、菱縫板の下辺で10.6cmで下すばまり型。対して平安末期の赤糸威の梅檀は全高29.5cm、上幅11.4cm、下幅12.6cmと大きく、かつ下披りです。これは前記した胸板幅の広狭によるもので、次第に胸板の幅が広めに、従って梅

檀板は小型、下すばまりになる傾向を示しているのです。

まさに大鎧の胴の形姿が紫裾濃の次の年代の鎌倉後期から緊張感のある腰細の裾すばまり型となってゆく前ぶれでしょう。

平安末期の裾ひろがりの梅檀板の赤糸威鎧は、胴もまた裾ひろがりのどっしりした姿です。紫裾濃の胴はまだ腰すばまり型ではありませんが、赤糸威の胴の上部と下部の小札枚数の差が札幅が広い上に六枚もあるのに、紫裾濃の方は五枚と少なく、胴が腰すばまり傾向で、きりつとした姿となるのは注目すべきです。

冠板の幅0.4cm、厚さ0.52cmの鍍銀の覆輪は当初のもので、胸板や脇楯の覆輪と同じ材質、すぐれた作技です。明治後補の大袖の覆輪と比較するとよくわかります。

冠板の表面には褪色した古い藻獅子文絵草の小片を継ぎ合わせて貼りますが、元来の

ものではなく、古い年代の修理でしょう。小縁の五星赤草、白紺紫白の配色の伏組は新補です。中央に外径3.3cmの裏菊二重小刻二重笠鉾の据文金物を打ちますが、化粧板の四個の同じ構成の八双金物と共に明治の新補。「集古十種」や明治修理前の写真では古い据文と八双金物は二個が残っていたのですが、本来のものは金銀とりあわせて笠鉾は鍍銀であったはずで、

化粧板の幅2.8cm、左右端は修補です。中央に古い三本草蒲文が、八双鉾の穴跡もある胸板の化粧板と共に残るのは貴重です。その下の水引の紅綾、白草共に新補。冠板の裏には、黒漆の鉄鍍一本を横鍍に打ち、足は表に抜いて据文下で開きとめ。棚の両端に縦鍍を打ち、この三鍍に新補の紅角八つ打緒15cmほどの付緒を通します。肩上手先の高紐の根に結んで装着する緒で、小札板の裏の内側の端板（一

枚目の小札）の上の掘穴から新補の角八つ打の36cmほどの控緒を出しています。

棚の中央に一对、足の両端に各一对の小穴、三箇所、小札一段目の板の毛立穴に通した新補の赤草を結び、冠板に小札板をしっかりと取り付けています。この足と小札一段目の裏包草や小縁・伏組は新補、左右両端の掘穴に新補の小刻座付笠鉾とめます。この裏包草は「集古十種」も描かず、早く欠失しました。

しかし、冠板裏面と棚の包草には、牡丹襷に霞地獅子丸文の絵草と、五点星形成以前の斑文白抜赤草小縁、白紫白紺の各五本縫いの伏組がもとのまま残ります。霞の輪郭・襷の牡丹にくずれがなく古様で当初以来の小縁・伏組、絵草として貴重で、胸板裏のものより保存良好。獅子丸文の四方の紅の葉花文も明瞭、辻の紅の花菱文と八窠文も古様で鎌倉初期の大三島の紺糸威

や厳島の小桜威鎧表絵草に類似します。裏の絵草には一時代古い年代様式を用いる例で、裏包草にまで伏組・小縁を施した初期の例でもあります。

小札板一段一〇枚、二段目まで鉄交各四枚。梅檀板まで鉄交とした大鎧の最古例。南北朝時代に向って、隙間なく防備するという志向の具現といえます。小札板は上は二本擲、下は一本擲、小札丈7.0cm、幅2.5cmで、擲の手法・寸法ともに胴と草摺に同じです。

威毛と耳糸・畦目は新補ですが、「集古十種」の記述によつて薄紫、濃紫の配色とします。梅檀板の重量は緒二条も含めて四七〇g。

御嶽の紫裾濃鎧は、構造・意匠・造形の細部にわたって平安の遺風残る鎌倉初期から武家がより主体化する鎌倉後期・南北朝期への移行期の特徴を指摘できる貴重な大鎧の遺例なのです。